



農村生活のすすめ

第3回：「働くこと」についてのすこし長いコラム

調査研究部 川井 真

目次

- | | |
|--------------------------|------------------|
| 1. 労働環境の変化 | 7. 労働と人間の生 |
| 2. 空虚な楽園からの脱却 | 8. 定常型理想社会へのまなざし |
| 3. 仕事と労働 | 9. ゼロ成長時代と労働の人間化 |
| 4. ジョン・ラスキンという人物 | 10. 使命感と人間愛 |
| 5. 『UNTO THIS LAST』とガンジー | 11. 変革の窓は開いた |
| 6. きれいな空気と水と大地 | 12. 美しい日本の真の豊かさ |

1. 労働環境の変化

いまどきの大学生たちと話しをしていると、「働くこと」の意識もわたし自身がキャンパスライフを謳歌していた30年ほど前と比べてずいぶん変わったものだ、と思うことがよくある。なにより働き方のスタイルが一様ではなくなったような印象を強くうける。しかしそれは選択肢が増加したからではなく、これまで一般的なライフコースとして用意されていた受け皿が激減したことで、あらゆる可能性をみずから探求しなければならなくなったことが要因ではないかと思える。多くの若者の心は、卒業を前に、夢や希望や野心といったポジティブな感情ではなく、むしろ不安感や絶望感といったネガティブな感情に支配されているのではないかと感じる。たびたびあり、なんとも切なくなる。

また先日の大学院での授業では——学生は20代から50代の社会人であるが——ひとりの学生から電機業界なかでも半導体部門の業績悪化が著しく、一社あたり数千人規模の人員

削減が求められているという報告があり、この現実を企業や社会はどのように受け止めるべきかを議論することになった。いずれにしても、段階的とはいえ数千人という数は尋常ではない。昨今の情勢を鑑みれば、企業の雇用吸収力が低下してきたことは理解できるが、数千人の人々が突如として恐るべき環境変化を受け入れざるを得なくなる、という現実をまえにして、そもそも労働とは、産業とは、経済とは、ひいては人間の生とはなんだろう、というテーマについて考えざるを得なくなった。

2. 空虚な楽園からの脱却

このとき、ふと思い出したのが、オーストラリア国立大学名誉教授で歴史学者のガバン・マコーマック (Gavan McCormack) 氏が20世紀末に発表した著作『The Emptiness of Japanese Affluence』、日本では『空虚な楽園——戦後日本の再検討』(みすず書房)として出版されているが、ここに書かれた以下

のコメントである。この本のなかでマコーマック氏は、「日本ほど社会生活が経済至上主義に奉仕するように構築されている国、あるいは市民が消費に追いまくられている国はないだろう。そして、日本ほど豊かさのむなしさが深く感じられる国もない」と述べているのである。

わたしたちはいま歴史の分岐点に立っていて、未来にむけて新しい価値を創り出していかなければならないのではないかと思う。P (plan) - D (do) - C (check) - A (action) という「カイゼン」のサイクルを回して上昇を試みても、努力が報われるどころか視界がどんどん下がっていくのは、今日まで拠り所としてきた構造そのものが地盤沈下を起こしているからではないだろうか。このようなときは勇気をもって立ち位置を変えてみることも必要なかもしれない。パラダイムの転換が求められていると言ってもいい。

3. 仕事と労働

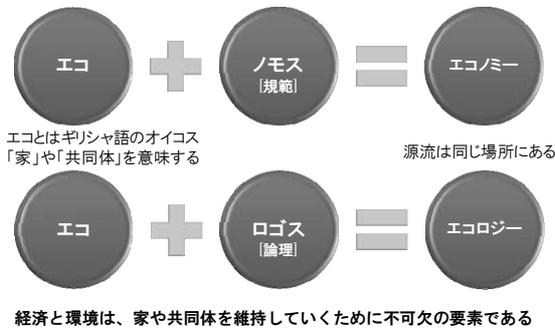
日本人はこれまで「働く」という行為をどのように受け止めてきたのだろうか。現代人が当然のことと認識している「労働」という概念は過去にも存在したのだろうか。労働は“LABOR”の訳語であるが、この言語には「苦痛」や「苦勞」や「困難」といった意味が含まれている。たしかに労働の起源を古代ギリシャにまで遡れば、労働は卑しい行為で主に奴隷を意味していた。それが中世以降にキリスト教思想の影響で尊い行為とみなされるようになり、禁欲と勤勉の労働倫理が資本主義の発展に寄与することになった。しかし産業革命以降、労働には低賃金・重労働という印象がこびりついているため、労働は苦痛を伴うものとして定着している。

どうやら「労働」は輸入品であるため、日本人が歴史的に育んできた「仕事」の感覚とは異なるものようだ。現代人が囚われている労働概念では、仕事は労働の意味を説明するための用語（道具）として用いられることが多い。経済的な自立の手段として仕事に就いて働き、報酬を得ることで生計を維持し、生活をゆたかにしていくこと、これが労働である。したがって労働の目的は報酬を得ることであって、そのために「苦勞」と「困難」に耐え、生きるために懸命に働き続けるというサイクルに埋没してしまう。古来、日本人の仕事には贈与の精神（贈り物としての意識）も組み込まれていたのだが、現代の労働からはそれを感じ取ることができない。そこで、労働のなかにこのような贈与の思想や、よろこびやたのしみの感覚を吹き込もうとした人物が、じつは19世紀のイギリスにも存在したので、ここで紹介しておこう。

4. ジョン・ラスキンという人物

ジョン・ラスキン (John Ruskin) は、19世紀イギリスの美術評論家で、また文壇において高い評価を得ている文筆家であり、かつ思想家でもある。当時の経済学という学問に対してきわめて懐疑的な態度を示し、とりわけ産業革命後のイギリス資本主義を支えたポリティカル・エコノミーという学問を厳しく批判した。デイヴィッド・リカードゥ (David Ricardo) やジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill) らが「所有と使用の対象としての価値」を財の交換の基礎に置いたのに対し、ラスキンは、それは「名誉ある富」によって理解されるべきである、と主張した。「名誉ある富」を理解する経済は、労働の価値を理解し、労働者の生存を優先する社会によって保

(図1) エコノミーとエコロジー



たれ、その健全性は「きれいな空気と水と大地」によって評価することができる、としている。ラスキンのなかでは、「エコノミー」と「エコロジー」は繋がっているのである（図1）。

5. 『UNTO THIS LAST』とガンジー

ラスキンはきわめて情緒的な言語表現を用いるがゆえに、その経済論文は功利主義と自由主義に大きく傾斜する当時のイギリス社会には受け入れられなかった。なにより彼の論文が思想的パラダイムの大転換を喚起するものであったことから、利害の対立を引き起こしてしまったことが要因であろう。ラスキンは政治経済学に関する四つの論文を1860年8月から『Corn-hill Magazine』（コーンヒル・マガジン）誌に連載するが、経済に感情が入り込んでいるといった酷評の猛攻撃にあい、この四篇を持って打ち切りとなる。しかしラスキンは怯むことなく、1862年にこの四つの論文を編纂し『UNTO THIS LAST』（この最後の者にも）と題する単行本にして世に送り出した。その序文で以下のように語る。「次の四つの論文は、一年半前に『コーンヒル・マガジン』誌に掲載され、わたくしの聞きえたかぎりでは、これを目にした大多数の読者によって、猛烈に攻撃されたものであ

る。しかしそれにもかかわらず、わたくしはこれを、わたくしがこれまで書いたものうち最上のもの、つまり最も真実で、最も正しく述べられ、そして最も世を益するものと信じている。そしてその最後の論文は、とくに労力を費やしたもので、おそらくこれ以上のものは今後書けないであろう」とまで言わせた労作となっている。ラスキンの主張の核心は第四篇にあり、「There is no wealth but life」（生なくしては富は存在しない）という言葉に集約されている。ラスキンの思想はマハトマ・ガンジーにも多大な影響を与え、『UNTO THIS LAST』はガンジーによってグジャラート語に翻訳され、『SARVODAYA』（万人の幸福）という思想の基盤になっている。

6. きれいな空気と水と大地

『自由論』や『功利主義論』等を著したJ. S. ミルは、19世紀のイギリスを代表する思想家（政治哲学者・経済学者）のひとりであるが、彼の著作『Principles of Political Economy』（経済学原理）においては、人間を「現存する知識をもとに、最小量の労働と自己否定によって得られるような、最大量の必需品、便宜、贅沢を手に入れるよう、必ず行動する者」と定義している。ラスキンは、このミルの定義に登場する「経済的人間」は過度に抽象化された幻影であり、資本主義経済が内包するリスクを無批判的に継続させ、それを自己正当化させる、としたうえで、これに対する根本的な批判が必要であると訴えた。ラスキンの定義は単純であった。もっとも重視すべきは人間の「生」であり、それを支えてくれるのは「きれいな空気と水と大地」であるから、これらを維持し、保護すること

こそ、価値の源泉に他ならないと主張したのである。

7. 労働と人間の生

ラスキンは、古典派経済学批判において、「労働」に関する問題点を以下のように示している。「労働という、人間の根本的な活動には、そのあり方を巡って肯定的なものと否定的なものが存在するが、古典派経済学においては、労働を否定的かつ消極的な側面のみで論じている。古典派経済学における富と財の循環モデルは、否定的な労働観念に基づいて設計されているため、労働に対する賃金を、単にコストとして捉え、その肯定的かつ積極的な意味は無視されている」と批判し、労働はあらゆる「生」の源泉である、と主張するのである。そのことを「労働というのは、人間の生が、それに対立するものと争うことである——すなわち「生」という語は人間の理知、靈魂および体力を含み、それらが疑問、困難、試練、あるいは物質的力と抗争するのである」という、アートのような表現方法を用いて人間の感性に訴えかけようとしていた。

ラスキンにとっては、労働は生産のためのコストではなく、労働は、生産物の消費とも密接に結びついている。したがって、消費そのものが「生」と直結しており、それが経済の中心にあると理解されなければならないと考えたのである。それは「生産の真の試金石は消費の方法と結果である。生産というのは苦勞してものをつくることではなく、有益に消費されるものをつくることである。そして国家の問題は国家がどれだけ多くの労働を雇用するかということではなく、どれだけ多くの生をつくりだすかということである。なぜ

かといえば、消費が生産の目的であり標的であるように、生が消費の目的であり標的であるからである」という彼の文脈から窺い知ることができる。

8. 定常型理想社会へのまなざし

わたしは、このようなラスキンのミルにたいする批判的な見解と独特な労働観にとても共感していたので、ミルに対しては若干の不信感も抱いていた。ただ誤解のないように補足しておけば、J. S. ミルという偉大な学者は、わたしに刺激を与え続けてくれる尊敬すべき人物のひとりである。だからこそ、機会があればラスキン発言へのミルの反応が知りたいと考えていた。じつはミルにもラスキンと同じように、仕事は「社会における役割取得」と捉えていたような発言が散見される。そして、あきらかに発展・拡大論者でもなかった。定常型社会をひとつの理想社会と考えていたことが彼の発言からもわかるのである。ミルは改革の必要性を訴えても、かならずしも成長を求めたわけではなかった。そこには仕事が内包する社会性を意識していたことが伝わってくる。それは「改革なくして成長なし」ではなく「成長なくて改革をこそ」と訴えた、故 都留重人氏の主張とも重なり合う。そこで久しぶりに、以前ななめ読みしかしていなかった都留氏の『市場には心が無い』を読んでみることにした。この本は、たとえば司馬遼太郎氏が亡くなる直前に書き下ろした『21世紀に生きる君たちへ』と同様に、都留氏が人生の最後に執筆した作品でもあることから、偉大な経済学者が終焉を意識しながら絞り出したメッセージには、なにか本質的なものが含まれているに違いない、という予感がしたからである。すると驚いたことに、

この本の最後の章、ななめ読みでは看過してしまった章に、ラスキンとミルが登場していた。

9. ゼロ成長時代と労働の人間化

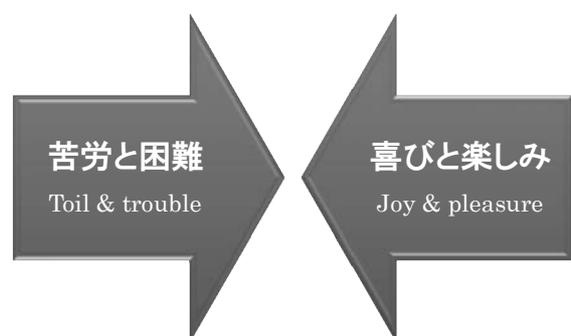
一橋大学名誉教授であった都留重人氏は、遺作ともいえる『市場には心がない——成長なくて改革をこそ』のなかで、ラスキンによって徹底的に批判されたJ. S. ミルの『Principles of Political Economy』（経済学原理）の一節を紹介し、続けて持論を展開している。ミルは『Principles of Political Economy』において、「資本と人口のゼロ成長状態は、人間的進歩の停滞を意味するものでないことは言をまたない。そこには、従来と同様、あらゆる種類の知的文化と道徳的ならびに社会的進歩の可能性が開けていよう。また、人びとの心が、ともかく先へ進むことばかりにとらわれることがないようになれば、生活の内実をゆたかにする余地も十分にあり、それが更に改良される見込みは、いっそう強まる」という見解を示し、それを踏まえて都留は、「人口の増加と同時に構成員の生活水準が上昇し続ければ、当然のこととして、生産かつ消費の対象となる自然資源は次第に枯渇していく。技術革新による対策はいろいろあろうけれど、それにも限界があるとすれば、ミルが言うように、成長志向の抑制をしなければならぬ時期がくる。しかし、その場合には、却って生活の内実をゆたかにする見込みが強まる、というのであって、言い換えれば、成長をやめることで改革がいっそう期待されうる、ということにほかならない」と語っている。まさに同感である。

ミルは、たぶんラスキンの主張も受け止めていたのであろう。この他にもラスキンらの

声を反映しているのではないと思われる発言を随所に見出すことができる。この二人にはアプローチの方法に違いがある。おかれた立場の違いといってもいいのかもしれない。ラスキンは人間の根源的な姿を追い求め、庶民の立場から労働の意味を問い続けた（ただ、支配者階級の任務と責任も重視していた）。一方、ミルは国家あるいは国政レベルから労働のあり方を模索していたのである。ミルもまた、「労働」と「仕事」とをある意味で分離させていたように思える。

ラスキンは「働くこと」を“OPERA”と表現し、それは“Work which recreates”であるとする一方、“LABOR”すなわち「労働」は“Work which corrupts or destroy”であるといった。まさに「労働の人間化」を訴え、それはウィリアム・モリス（William Morris）によって「生活の芸術化」へと発展的に受け継がれていく（図2）。彼らにとって「仕事」は役割認識であり共同体における役割取得でもあったように思う。

（図2）労働の定義における対立



10. 使命感と人間愛

先般、総務省ならびに経済産業省は2012年の経済センサス・活動調査を公表したが、雇

用吸収力では老人福祉・介護分野がもっとも高く、病院や診療所といった医療分野も上位に入っている。しかし、いずれも生産性は低いという評価がついている。これらは政府が成長戦略の柱と位置付ける業種でもあるため、日本経済を牽引するためには生産性を向上させる必要があるとして、医療や介護や高齢者福祉の分野に競争メカニズムを組み入れて生産性を上げるというような提案をときおり耳にするが、これはあまりにも短絡的な判断であると言わざるを得ない。ラスキンの言葉を借りるならば、ケアに携わるものが大量の仕事をするのは、その意思や心や使命感が情愛というエネルギーによって最大の力を発揮するときであって、欲望や強制や対立からは何も得ることはできないということである。環境や経験や教育を通して社会性や贈与の精神を涵養し、それが暗黙知となって共有されているのが医療や介護の現場なのである。

したがって、身内の介護も——本音を言ってしまうえば——公的サービスに委ねたいと考えてきた人たちが、生計を維持するための手段として介護職を選択するのは、正直なところ無理があるように思う。なぜなら、仕事としての介護は、不特定多数の高齢者や重度の障害を抱える方々の下の世話まですることになるのだから、たんなる賃金労働という認識で介護の現場に入ることが、いかに無謀なことであるかは少し考えてみればわかるだろう。かならずしも報酬の多寡の問題ではない。介護の現場では「仕事＝役割取得」という意識が多分に求められることになる。それは使命感もしくは人間愛と言い換えてもいい。報酬を得ることだけを目的に、「苦勞」や「苦痛」や「困難」という言葉に象徴される労働観を

引きずった介護者あるいは介護事業者が席卷することにでもなれば、サービスの質のみならず、わずかに保たれている社会的紐帯さえも完全に切断してしまう可能性があると思うからである。介護にかぎらず社会サービス全体の質を保つためには、管理機能を強化したり、監視体制を高度化したり、ましてや法で縛ったりすべきではないように思える。なぜなら、もし自分自身が、あるいは愛する家族が被介護者となったとき、わたしたちはお世話になる介護者の仕事に対する向き合い方や、ひいては介護者の人柄や人格までも包摂して、そこで提供される介護サービスの質を評価するはずだからである。まさに「働くこと」への意識が、重要な意味を持つのである。

11. 変革の窓は開いた

冒頭で紹介したマコーマック氏の書籍『空虚な楽園——戦後日本の再検討』の巻末では、日本の現状を憂いながらも、「とは言っても、危機は変化のためのよい機会ともいえる。現代日本の豊かさの物質的・技術的基盤という実績に疑問の余地はないし、日本の最大の富は国民の善良さ、寛大さ、人間性、知力にある。冷戦の狂気、行きすぎた企業社会、環境悪化、物神崇拝的消費至上主義、そして今は、集団的な憂うつ症とヒステリーにたいして過去数十年間闘ってきた大衆に深く根ざした変革への願望は、通常、国際メディアには見えないが、政治経済の3C（建設、消費、管理）とはまったく違った3C（共同社会＝COMMUNITY、協力＝COOPERATION、保全＝CONSERVATION）のネットワークを草の根レベルで維持している」として、「私が33年前から知っているこの日本の国を傷つけてきた、便利さと利益の追求のみに傾倒し、

ひたすら拡大をつづけてきた近代的企業社会の拡大も押しもどされるだろう。と、このように私は考えたい」という希望を語っている。そして最後に、「私が生きているうちにこうした従来の動きが逆回転するとは思えないが、幸いに私が生まれ変わることができれば、私が改めて見出す日本は、ちょうど高度成長が始まりかけた1962年に私がはじめて出会ったすばらしい美しさと、蘇った地域社会、世界への門戸開放、ゼロ成長の経済と排出物ゼロのテクノロジー、そして汚染・破壊された山や河川や海の回復などにもとづく脱成長期の秩序の知恵と円熟とが結びついた国であってほしい」として結ばれている。マコーマック氏はまた、3.11東日本大震災という未曾有の惨劇の後に行われたマサチューセッツ工科大学教授で歴史学者のジョン・ダワー (John W. Dower) 氏との対談において、日本に「変革の窓が開いた」と語った。わたしたちは、日本の最大の富を取り戻すためにも、この声を真摯に受け止める必要があると思う。

12. 美しい日本の真の豊かさ

すくなくとも、都市と農山漁村の関係を産業論的な視座から捉え直してみることは重要であるし、それは人口の偏在を是正することにもつながるのだから、農山漁村の環境収容力と雇用吸収力を高めるために知恵を出し合うのは大切なことだ。汚染・破壊してしまった山や河川や海の回復、コミュニティ機能の再生なども含めて、美しい日本の資源と景観を取りもどすためには、まさに喫緊の課題なのだろうと思う。

ただ、これからの都市と農山漁村の暮らしや経済のあり方、そして働き方を考えるにあたり、日本人にとっての21世紀という時代が

不可逆的な人口減少を伴う高齢社会である、という現実から目を背けることもできない。したがって、経済的な発展・成長のモデルだけが豊かな未来を拓く唯一の道であるかのごとく吹聴するのは、とても無責任であり、それはまた社会をミスリードすることになってしまうかもしれない。ミルそして都留が語ったように、資本と人口のゼロ成長状態は人間的進歩の停滞を意味するものではないし、成長志向を抑制して生活の内実をゆたかにする方向へと導いていくことが、いまの日本には求められているのではないだろうか。たとえば医療や介護といったケア関連サービスは、サービス産業といえども第一次産業との相性がとても良いと思う。活動範囲が限定的であり、流動性よりも関係性を求め、思想的には農業と重なり合う部分も多々ある。これらはすべて生活の内実をゆたかにする仕事であり、まさしくソーシャルビジネスと呼べるものであろう。これからは、「働くこと」への意識や「生きがい」や「豊かさ」といった情緒的で感覚的なものも含めて、もうすこし根源的な部分にまで踏み込んだ議論をしていかなければならないのではないかと、という思いに至るのである。

(参考文献)

- ・ジョン・ラスキン 著、飯塚一郎・木村正身 訳(2008)『この最後の者にも・ごまとゆり』中央公論新社
- ・ガバン・マコーマック 著、松居弘道・松村博 訳(1998)『空虚な楽園——戦後日本の再検討』みすず書房
- ・都留重人(2006)『市場には心がない——成長なくて改革をこそ』岩波書店